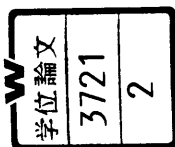


早稲田大学審査学位論文(博士)の要旨

2003	早大学位記報告番号 3721 甲 乙1860
------	---------------------------



二〇〇三年度

博士学位請求論文

指導教授 田中隆昭教授

物語文学の受容と生成に関する研究 概要

早稲田大学大学院文学研究科 日本文学専攻
新美哲彦

物語文学の受容と生成に関する研究

序章	1
第一部 『うつほ物語』の諸本と伝流	11
第一章 『うつほ物語』共通祖本の特徴	12
第二章 『うつほ物語』の諸本——主要四系統の位置関係及び性格——	20
第三章 『うつほ物語』の伝流——幽齋本・三条西家断簡から——	31
第二部 『源氏物語』の本文世界	42
序節	43
第一章 賢木巻の本文世界素描(一)——源氏をめぐる女君たち——	45
第二章 賢木巻の本文世界素描(二)——苦惱する／＼したたかな藤壺——	57
第三章 総合巻の本文世界素描——朱雀院の造型と絵——	78
第四章 総合巻の物語絵合と源氏の造型——諸本文の差異から——	85
第三部 物語の成立と変容	91
第一章 『風につれなき物語』伝本について	92
——無窮会図書館蔵神習文庫本を中心に——	
第二章 『風につれなき物語』の現存本文について	100
第三章 散佚物語『御垣が原』考——その特質と成立圏——	110
第四章 『堤中納言物語』の編纂時期	121
——「思はぬ方にとまりする少将」の成立から——	
第四部 物語の享受	130
第一章 『光源氏物語抄』所引「こまのゝものがたり」考	131
——散佚『こまの』・『交野の少将』・『隠れ蓑』との関係再検討——	
第二章 『光源氏物語抄』から『河海抄』へ	141
——中世『源氏物語』享受の一側面——	
第三章 『光源氏物語抄』と了俊筆伊予切	155
——『光源氏物語抄』の流通経路——	
第四章 近世前期の写本製作	164
——伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から——	
終章	177
資料編	183
第一章 無窮会図書館神習文庫蔵『風無面物語』翻刻と校異	184
第二章 伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故	
——翻刻と紹介・文学資料篇——	211
第三章	
——翻刻と紹介・雑記篇——	230
あとがき	252

物語文学の受容と生成に関する研究・概要

序章

文学作品を読むとは一般にはどのような行為と考えられているのであろうか。ある時期（成立時期）に「作者」によって作成された一つの「本文」が、一つの「作品」として流通し始める。その「作品」を「読者」が「読む」という行為によって頭の中で再構成する。一般に考えられているのは、こんな図式ではないだろうか。

だが、物語の場合、「本文」は複数ある。よく知られているように『狭衣物語』、『住吉物語』などは、さまざまに語られた、さまざまな本文を有しているし、それ以外の物語も、孤本でない限り、諸本を有しており、その諸本にはさまざまな差異がある。「作品」は固定されたものではないのだ。

「作者」が一人とも定まっていない。例えば、『うつほ物語』であれば、現在読むのとはほぼ同じ形の本文になるまでに何段階も経ているようである。『伊勢物語』も同様の事情が考えられているし、『源氏物語』も、正編と宇治十帖で「作者」が同一であるとは限らない。

また、『いまとりかへばや』などの改作、『源氏小鏡』などのダイジェスト、引用、模倣など、さまざまなレベルで、受容とともに生成が行われており、「注釈」の歴史などからも、物語に対する眼差しが時代によって異なっていることがうかがえる。

このようにさまざまな問題を含んでいるにも関わらず、物語（古典作品）を現代の読者が読む場合、複数の本文を「校訂」することで「本文」を固定化し、「注釈」によって、さらに読みを限定された「作品」を、現代の読者が読む、という形で、さまざまな問題を削ぎ落として享受されることがほとんどではないだろうか。

本博士論文では、第一部『うつほ物語』の諸本と伝流、第二部『源氏物語』の本文世界、第三部「物語の成立と変容」、第四部「物語の享受」、と大きく四部に分けて、物語文学のさまざまな問題を論じる。

第一部 『うつほ物語』の諸本と伝流

第一部では、諸本の整理が遅れてきた観のある『うつほ物語』の諸本を整理し、現存諸本が、一本の共通祖本から派生したことを明らかにする。

第一章 『うつほ物語』共通祖本の特徴

『うつほ物語』諸本の整理は、多くの校本を作成した近世の国学者以来、研究者を悩ませている問題であるが、最近、研究が停滞しているようである。この停滞には、「吹上」下に見られる複数箇所欠文や「内侍督」の錯簡と見られる箇所などから、『うつほ物語』現存諸本はすべて一本の共通祖本から派生したと考えられることなどの、しかるべき理由もたしかにある。だが、共通祖本から現存諸本への距離や、共通祖本の特徴などについては、共通の欠脱を有するという以上の具体的な言及はなされていない。現在知られている本以上の善本が急に出現することは期待できない今、共通祖本の具体的な姿を追うことは、現存諸本の本文の性質や限界を知る上で必要な作業であろう。

本論考では、共通祖本の具体的な姿を、『風葉和歌集』との異同、異文注記、字詁を中

心に追った。従来の研究では漠然と想定されていた共通祖本だが、複数あつたであろう諸本のうち、中世における欠脱の多い一伝本が共通祖本として残つたと考えられる。その上で、現存諸本の直接の共通祖本にすでに異文注記があつたことを論証し、共通祖本を、一次共通祖本と二次共通祖本に分けた。そして、一次共通祖本から派生したであろう諸本のうち、異文注記から見て、一次共通祖本から遠ざかるかと推測される一伝本が二次共通祖本として残つたことを考察した。さらに、その二次共通祖本の字語を、前田家本系上位の本がそのままの形で残していることも考察した。

また、『風葉和歌集』との異同を詳細に検討し、『風葉和歌集』の『うつほ物語』と、現存諸本の『うつほ物語』との間に、物語世界の微妙な揺れを看取しうることを見た。

『うつほ物語』の従来の本文研究において、近世国学者も近現代の研究者もテキストを一つに固定しようとした点では同じであつた。今、本文を固定するとすれば、現存諸本から遡りうる最古の形である二次共通祖本を可能な限り復元した本文に固定するか、前田家本系上位の本文をそのまま固定することになるだろうが、本稿の考察は、二次共通祖本の時点での多くの問題点を示している。しかも、物語の本文とは、もともと変容しつつ享受されていくものである。これからは、さまざまな本文の変遷を経つつ、一つの作品としてある「物語」というものを考える視点が重要になってこよう。

第二章 『うつほ物語』の諸本——主要四系統の位置関係及び性格——

近年、『狭衣物語』や『源氏物語』において、「原^{オリジナル}態」に近いと判断される一つの本文に本文を固定するのではなく、複数ある諸本（本文）に含まれる複数の論理を読み解こうとする研究が、盛んになりつつある。考えてみれば原^{オリジナル}態からの遠近＝本文の優劣という価値図式に囚われることはないし、物語の本文は一つでなければならないというのは思い込みに過ぎない。同様の手法に拠る研究は、『うつほ物語』でも当然有効であろう。

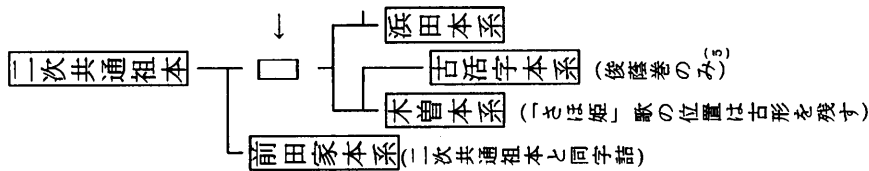
ただし、諸本文の発生が鎌倉時代やそれ以前に遡り得る『源氏物語』や、多様な本文を有する『狭衣物語』などとは違い、『うつほ物語』の現存諸本には近世初期からさほど遡らない時点に具体的な共通祖本が想定できる。その共通祖本と現存諸本の関係については、すでに前章「『うつほ物語』共通祖本の特質」で考察し、「複数存在したであろう諸本のうち、中世における欠脱の多い一伝本が一次共通祖本として残り、さらに一次共通祖本から派生したであろう諸本のうち、異文注記から見て、一次共通祖本から遠ざかる本文を持つ箇所も多いと推測される一伝本が二次共通祖本として残つた。そして、その、異文注記を有する二次共通祖本から現存諸本は派生する」ことを明らかにした。

このような現存諸本の特性から、『うつほ物語』の場合、それぞれの本文の論理を読み解くことと、共通祖本から現存諸本への本文派生の道筋をたどり、現存諸本が生成される現場を押さえることが、他の物語以上に、密接に関連すると想像される。

本稿では、前田家本系、木曾本系、浜田本系、流布本系と四系統に大別されながら、漠然としか位置づけられてこなかった諸系統の位置関係を定めた後、諸系統の本文の性格や特徴について整理した。その結果、諸本系統図は、異同や脱落から見て、左記のようになると考えられる。

「さほ姫」歌（二三〇番歌）の位置のずれ

共通脱落箇所 ← 流布本系（巻によって系統を異にする）



また、すべての巻における前田家本系の純粋な本文は前田家本と天理本の二本のみである上に、木曾本系と浜田本系の祖本が、二次共通祖本や前田家本系上位の本とほぼ同字詰であったことが判明した。このことから、木曾本系と浜田本系で一致し、前田家本系と異なる本文を有する箇所は、二次共通祖本の本文を探る上で重要な箇所となろう。

さらに、主要系統の位置関係が明らかになったことにより、中世から近世にかけての『うつほ物語』の伝流や享受を、より細かくたどることも可能になると思われる。従来の本文研究であれば切り捨てられるであろう、木曾本系の意改箇所なども、木曾本系の本を近世初期の三条西家が書写することを考えると、中近世における古典研究や、『うつほ物語』校訂の先駆的業績としても、中近世における意図的な本文生成の観点からも、興味深く、今後、精密な調査が必要となろう。

このような考察を土台として、諸系統の本文の論理を読み解いていけば、物語というものの豊饒なエネルギーがより鮮明に見えてくるのではないだろうか。

第三章 『うつほ物語』の伝流——幽齋本・三条西家断簡から——

『うつほ物語』の諸本研究は、多くの校本を作成した近世の国学者以来、研究者を悩ませている問題であるが、最近、停滞しているようであり、前田家十三行本（以下、前田家本と呼ぶ）以外の諸本文の紹介も進んではいない。このような状況は、『源氏物語大成』や『源氏物語別本集成』がある『源氏物語』、『狭衣物語諸本集成』の刊行される『狭衣物語』など、他の平安時代を代表する物語と比較しても、日本最古の長編物語にふさわしいとは言いがたい。

この停滞にはしるべき理由もたしかにあるものの、前田家本＝最善本という図式があまりにも重く考えられてはいないだろうか。前田家本系の本文が必ずしも古形を遺していないのではないかと疑われる部分も存在するのであり、前田家本だけに偏る現状を打破し、前田家本系の他諸本の位置関係や、他の主要系統の性格の把握などの、諸本研究を地道に進めることによって、『うつほ物語』の伝流をさらに明らかにし、共通祖本の本文に近づくことは、当然、可能だろう。ただし、『うつほ物語』の流通が盛んになった近世後期作成の本には、校合などの作業を通じて他系統の本文が混入することも考えられる。

現在、近世初頭の素性のよい本文としては、箱書に「慶安四年七月／後水尾天皇所／賜我／黄門利常卿也遂以為家珍焉」と書かれる前田家本しか知られていない。このような素性のよい本文を含めた近世初頭の『うつほ物語』をなるべく多く明らかにしてから、諸本系統の再整理を行う方が、共通祖本の本文に近づく作業がやりやすいと判断する。

本稿では、細川幽齋の本奥書を有する『宇都保俊蔭』と、早稲田大学図書館蔵三条西家旧蔵伝実枝筆『源氏物語』表紙裏から見つかった『うつほ物語』断簡を取り上げ、その本文系統を探ることによって、近世初頭以前の素性の好い『うつほ物語』の本文に、前田家本以外にどのような系統があるのかを見てみた。

その結果、まず細川幽齋の本奥書を有する『宇都保俊蔭』（以下、長谷本と略称）を検討し、共通脱落箇所から長谷本も小汀本同様、古活字本系の祖本に近い位置にある写本と位置づけた。

次にこの古活字本系と影響関係にある木曾本系に関連し、江戸初期の堂上家に関係する断簡として、早稲田大学図書館蔵三條西家旧蔵伝実枝筆『源氏物語』表紙裏から見つかった『うつほ物語』断簡を取り上げた。そして、詳細に他本と校合した結果、木曾本系の『うつほ物語』を近世初頭の三條西家が書写（おそらく所持）したことが明かとなった。

奥書や箱書などにより知られる、近世初期の素性の良い本文は、前田家本しかなかった『うつほ物語』であるが、以上の考察により、慶長四年（一五九九）の幽齋奥書を持つ長谷本が、室町後期書写といわれる小汀本と密接な関係を持ち、古活字本系の祖本に近い位置にある写本ということと、古活字本系と影響関係にある木曾本系を近世初頭の三條西家が書写（おそらく所持）したことが判明した。

室町末から近世前半にかけての『うつほ物語』の流通に関しては安藤菊二、中村忠行、中野幸一などに詳しい考察があるが、すでに近世初期に存在したことが明かな伝本に、今回の結果を加えて諸本研究を行えば、諸本間の相当細かな再整理ができようし、これまであまり注目されなかった木曾本系を交えた主要系統の再整理をすることで、『うつほ物語』共通祖本の本文を透かし見ることも可能になろう。

また、『うつほ物語』を含めた物語の享受変遷や流通の歴史を考える上でも、意図的な字句の変換を行い、読める本文にした本が、三條西家で書写されることと、幽齋奥書を持つ長谷本が、堂上家の関わることの多い古活字版の祖本に近い位置にあることは、興味深い。木曾本系と古活字本系が影響関係にあることや、幽齋と三條西家・中院家など堂上家との関わりを含めて考えると、幽齋本の親本が中院家などの堂上家から借りた本であつて（または中院家などの堂上家に流れ）そこから古活字版の本文が作成されたのか、あるいは、木曾本系の本文は三條西家で作成されたか、など、近世初頭の『うつほ物語』の流通に関して様々な推測や想像が可能になろう。

第二部 『源氏物語』の本文世界

『源氏物語』の本文系統は、青表紙本系、河内本系、それ以外（別本）に三分される。そして、現在の『源氏物語』研究は、主に青表紙本系（大島本や伝明融筆本、伝定家筆本を中心とする）に拠る校訂本文の上に立つて推し進められている。このような現在の研究状況を否定するつもりはないが、様々な本文の存在を無視することは、「物語」の重要な側面を切り捨てる行為であろう。

従来の本文研究では、成立時の本文（＝^{オリジナル}原態）を頂点として、原態から乖離するほど価値も下降するとしてきた。そして、現存諸本から文献学的に推測される、最も成立時に近い本文にテキストを固定化し、その中で「物語」を読み込もうとしてきた。

『源氏物語』の場合であれば、大島本や伝明融筆本、伝定家筆本を中心に複数の諸本で校訂した本文で物語を読み解く行為も、大島本のみを忠実に読み解こうとする行為も、物語の本文を固定化した上で、一つのテキスト内の物語だけを読み込んでいる点では同じである。

しかし例えば、『源氏物語』の場合、「原作者」とされる紫式部の時点ですでに複数の

本文が生成されていたし、『平家物語』や説話、室町物語などを引き合いに出すまでもなく、原態が最も価値を有するというわけではない。

そしてまた、本文の校訂作業は、同時に新たな本文を生み出す行為でもある。

このような本文生成は、『紫式部日記』で確認される複数の本文の存在を筆頭に、鎌倉時代の定家の青表紙本や源光行・親行の河内本、室町時代の三条西家の本文、近世の『首書源氏物語』や『湖月抄』の本文、現代の新日本古典文学全集や新古典文学大系などの校訂本文に至るまで、物語成立時から現代へ、そして未来へと営み続けられるのであり、原態は、本文の変容過程における初期の一形態に過ぎない。

この際、原態からの遠近＝本文の優劣という価値図式を切り離し、さらに物語の本文は一つでなければならないという思い込みを外してみよう。そこには諸本によつてさまざまに異なる物語世界が広がっているように、そこに時間軸を採り入れるならば、物語成立時から現代に至るまでの連続たる本文生成、変容し続ける物語の豊かな姿が浮かび上がってくるのではないだろうか。

第一章 賢木巻の本文世界素描——源氏をめぐる女君たち——

本章で取り上げる賢木巻には、六条御息所との別れ、桐壺院崩御、源氏の藤壺との逢瀬、藤壺の出家、朧月夜との密会の露顕、と、以降の物語展開の上で重要な出来事が並ぶ。その中でも、源氏の「癖」と関連づけて語られる六条御息所母娘、朝顔齋院、朧月夜を中心に、河内本系、青表紙本系の差異を見ていく。

その結果、個々の異同は微細な差に見えるものの、人物ごと、場面ごとに異同を読み解くことによつて、それぞれの人物造型や場面の意味に明かな差異が立ち現れてくることに気付かされよう。

また、それぞれの引用箇所で見たとおり源氏の「癖」を河内本系は強調して描く。河添房江は朱雀朝には「〈巫女体制〉ともいふべきもの」が「有効に機能して」おり「そのことにより、朱雀帝は、朧月夜のように実質的な皇妃を確保したばかりでなく、光源氏の色好みの対象であったところの朝顔の姫君や、六条御息所母娘を神の禁域に囲いこみ、光源氏を掣肘することも可能にした」（『朱雀皇権の巫女・朧月夜論』『源氏物語作中人物論集』勉誠社 一九九三・一）と述べる。朱雀帝が、源氏の恋愛対象である女君たちを囲い込むことで、河添房江が述べるごとく、源氏は「掣肘」されたわけだが、この論を敷衍すると、さらに、彼女たちが禁忌の女性となったことで源氏の「癖」は発動され、須磨流謫という第二の「掣肘」が呼び込まれるとも読み解けよう。

河内本系では、その源氏の「癖」をより強く浮かび上がらせることで、必然の結果としての源氏の須磨流謫を描こうとしているかのようである。総合巻の桐壺院の絵に関しては「河内本系では、権力を握った源氏に対して、朱雀院に権威があることが暗示されており、逆に、青表紙本系では源氏に権力も権威も集中することが暗示されていると解釈」（第二部第三章参照）できた。この傾向と連動させれば、賢木巻においても朱雀帝の存在は、間接的ながら、青表紙本系よりも河内本系で、より重要な位置を占めると解釈することもできよう。

第二章 賢木巻の本文世界素描——苦惱する／したたかな藤壺——

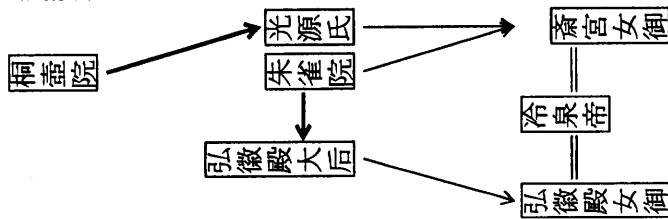
における差異を、諸本の異同を追うことによつて見ていく。

その結果、河内本系には、絵に焦点を合わせ、朱雀院と前斎宮の結びつきを強める傾向があり、「桐壺院の絵の行方」に関しては青表紙本系と河内本系で流通経路が対照的になるという興味深い現象が見られる。

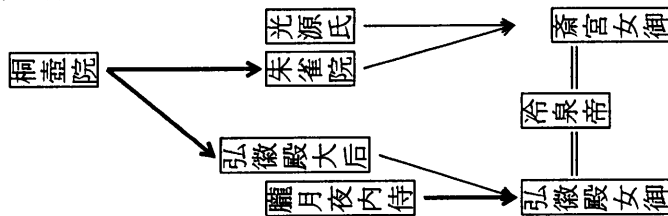
絵の流通経路

※絵の流通経路を矢印で示す。青表紙本系と河内本系で異なる箇所を太線で示した。

青表紙本系



河内本系



桐壺院の絵の流通経路は青表紙本系と河内本系で分かれるが、この絵の流通経路を「王権における権威の象徴」に置き換え、上記の日本における王権の特徴を考え併せると、河内本系では、権力を握った源氏に対して、朱雀院に権威があることが暗示されており、逆に、青表紙本系では源氏に権力も権威も集中することが暗示されていると解釈できよう。さらに青表紙本系では源氏への権威権力の集中が危惧となり巻末の出家願望などへとつながるように読むことも可能であり、桐壺院の絵や朱雀院の描写に関する青表紙本系と河内本系の差異はさまざまな問題を孕んでいよう。

第四章 絵合巻の物語絵合と源氏の造型——諸本文の差異から——

本章では、前章で取り上げられなかった、絵合巻の物語絵合の結果と源氏の人物造型を中心に、河内本系と青表紙本系との異同から読みとれる、それぞれの物語世界を検討した。

河内本系、青表紙本系の異同を検討してきたが、絵合巻における河内本系や青表紙本系の主要な特徴のいくつかは明らかになったのではないだろうか。

さらに、以上の検討によつて、「絵合」の読みの多くが、『源氏物語』の論理ではなく、青表紙本系『源氏物語』の論理（物語絵合では、河内本系の論理）を読み解いていたに過ぎないことにも気付かされる。

青表紙本系の物語世界を照らし出すためにも、そして青表紙本系固有の論理とすべての諸本に共通する『源氏物語』の論理を分別するためにも、一層、河内本系や別本諸本における物語論理を丹念に読み解いていく作業が必須であろう。

第三部 物語の成立と変容

第一章 『風につれなき物語』伝本について

— 無窮会図書館蔵神習文庫本を中心に —

『風につれなき物語』は『風葉和歌集』に四五首（詞書の歌も含めると四六首）も入集している鎌倉時代前期屈指の物語である。この入集歌数は『源氏物語』『うつほ物語』『狭衣物語』について第四位であり、『風葉和歌集』撰集時点では非常に高い評価を受けていたことが知られるにもかかわらず、現存本が首巻のみの残欠と考えられる零本であるためか、あまり研究のなされていない物語の一つである。

『風につれなき物語』現存諸本の中において、丹鶴叢書版本は、鎌倉時代物語集成第二巻や中世王朝物語全集の底本として採用され、中世王朝物語全集解題に「現在抛るべきは丹鶴叢書版本ということになろう」と述べられており、現在のところ最善本とされているようである。

現存諸本を整理し、無窮会本と丹鶴叢書版本を比較した結果わかったことを次に整理する。

現存諸本の共通祖本である伝後醍醐天皇宸翰本（所在不明）を直接書写したと思われるものは、無窮会本と丹鶴叢書版本の二本のみである。

そのうち現在のところ最善本とされているようである丹鶴叢書版本は、すでに指摘されている仮名遣いの改変のみではなく、本文の語句自体も補っている。

よって現存諸本の中で伝後醍醐天皇宸翰本の本文に最も忠実である本は無窮会本であろうと考えられる。

以上の調査から、これから『風につれなき物語』を読む際には、無窮会本を底本に据えて、丹鶴叢書版本で対校して本文を作ることが肝要であり、その上で無窮会本と丹鶴叢書版本との異同箇所について丁寧に読み解いていくという作業が必要となろう。

また現存諸本の共通祖本である伝後醍醐天皇宸翰本に物語名の記載がなかったことも、現存本が『風につれなき物語』という題名を持っていたのか、『風葉和歌集』撰集時点の『風につれなき物語』と安易に重ね合わせてよいのかという点で注意すべきであろう。

第二章 『風につれなき物語』の現存本文について

『風につれなき物語』は、鎌倉時代に製作された屈指の長編物語である。ただし、完本は伝存せず、『風につれなき物語』と題される残欠の物語が一系統四本のみ存する。この四本はすべて伝後醍醐天皇宸翰本（所在不明。以下、伝宸翰本と呼ぶ）を共通の祖本とする。なお伝宸翰本には物語名の記載のなかったことが知られている。

以上のような諸本を持つ『風につれなき物語』とされる現存の残欠物語（以下、現存本と呼ぶ）の本文については、現存本が『風葉集』撰集時点での『風につれなき物語』（以下、原物語と呼ぶ）の残欠である可能性と、原物語の簡略化されたものの残欠である可能性が従来考えられてきた。

しかし、現存本と原物語がどのような関係にあり、現存本の本文がどのような性格のものであるのかは未だ判然としてはおらず、それらを検討することは、今後の研究をすすめる上での大前提となる。そこで、それらを解明すべく、現存本の一本である丹鶴叢書版本に脱落かと注記される二箇所、研究者により脱落が想定されている別の二箇所、および、詞書に相当すると推定される場面が現存本にありながら現存本には見えない『風葉集』所

載歌八首、以上を検討した。そして、考察の結果、現存本は、原物語から、物語の筋も歌の言葉も変えずに、描写や歌などを大幅に削除し簡略化した、物語名を持たない首巻のみの残欠本（伝後醍醐天皇宸翰本）を共通祖本とする転写本と見ておくのが妥当と結論づける。

第三章 散佚物語『御垣が原』考——その特質と成立圏——

散佚『御垣が原』（以下、本物語と呼ぶ）は、『風葉集』に四三首（存疑歌二首）入集する。これは、『源氏物語』（一八〇首）『うつほ物語』（一一〇首）『狭衣物語』（五六首）『風につれなき』（四五首）の次に位置し、『いはでしのぶ』（三三首）『浜松中納言』（二九首）『夜の寝覚』（二五首）を上回る。この入集歌数の多さから、鎌倉時代前期を代表すると判断すべき物語である。だが、本物語は『風葉集』にのみ見られる散佚物語で、多くの散佚物語と同じく、復元以外ではほとんど研究されていないのが現状である。

本論では、まず本物語の構成と特質を見た。その結果、本物語の構成を整理すると、先行研究の指摘とは違い、春の院、後春の院、帝の三代の御代を描いた物語であり、本格的に物語が展開されるのは後春の院の御代からであろう、ということになる。また、物語の人物関係を見ていくと、帝と中宮が明確な主人公性を有している。このように明確な主人公性を帝と中宮が持つ物語は非常に特異であり、本物語の舞台となる宮中とともに本物語の特質として挙げられるものだろう。また、「御垣が原」という題名は、古歌及び『俊頼髓脳』の芹摘説話や『源氏物語』の影響を受けつつ、本物語の舞台である「御垣」のうち（宮中）と、数多く描かれる忍ぶ恋や悲恋を象徴すると考えられる。題名を視野に入れることによつて、本物語の特質はより明白なものとなる。

つぎに成立に関して、物語歌に影響を与えたと思われる参考歌を調べ、参考歌の載る『続古今集』『万代集』『秋風抄』『秋風集』などが後嵯峨院時代撰集の歌集であることから、本物語歌は後嵯峨院時代の所産であるとした。

さらに、本物語の成立圏について、本物語の成立時期が後嵯峨院時代と推測されること、本物語の特質と後嵯峨院周辺における政教性の符合を考えあわせると、成立圏として後嵯峨院周辺を想定するのが自然であろうと結論づけた。

以上の考察に加え、本物語の研究基盤を作るために、末尾に詳細な登場人物一覧と想定系図を付した。

第四章 『堤中納言物語』の編纂時期——「思はぬ方にとまりする少将」の成立から——

『堤中納言物語』が現在のように十篇（十一断章）という形態になった時期・書名の由来・個々の作品の成立などについては諸説入り乱れており、編纂だけに限っても、土岐武治、山岸徳平などの中世に成立を引き下げようとする説や、寺本直彦や稻賀敬二の定家編纂説、増淵勝一の小式部周辺に作者・編者を求める説など、さまざまである。

ここで、『堤中納言物語』の個々の作品の歌数と『風葉和歌集』入集歌数を比較すると、歌数のもつとも多い「はなだの女御」（十二首）からは『風葉和歌集』に入集してない。一方、「ほほどほどの懸想」や「はいずみ」は物語全歌数四首中一首、「貝合はせ」は三首中一首、『風葉和歌集』に入集する。かならずしも歌数が多いから入集するとは限らないが、もし『風葉和歌集』撰集時点で十編（十一断章）が現在のようにひとまとまりであつ

たなら、「はなだの女御」や「思はぬ方にとまりする少将」などから入集していてもよいようにも思われる。また、『風葉和歌集』に『堤中納言物語』の名称はまったく見られない。さらに、鎌倉期から南北朝期にかけての成立かと言われることも多い「よしなしごと」は物語内に和歌もなく、やはり中世の匂いが濃い作品であるように感じる。

従来諸説入り乱れる観のあつた『堤中納言物語』の成立だが、「思はぬ方にとまりする少将」の引歌、および「元中二年書写」の巻物の存在により、『新後撰和歌集』の編まれた嘉元元年（一三〇三）以降、元中二年（一三八五）以前の八〇年ほどの間に現在の形になったと考えられる。これは、従来から鎌倉・南北朝期成立説の有力な「よしなしごと」の成立時期とも合致する。さらに、「思はぬ方にとまりする少将」の引歌が二条良基の父道平作であることから、土岐武治の言う二条良基編者説は再検討の余地が出てくるのではないだろうか。

また、以上の考察により、『堤中納言物語』に、「逢坂越えぬ権中納言」の天喜三年（一〇五五）から、「思はぬ方にとまりする少将」の嘉元元年（一三〇三）以降という二五〇年〜三〇〇年ほどの間に成立した物語が集められていることが確かめられたが、このように長期間の間に作成された短篇物語が集められて短編集として享受されていることは、中世における物語享受の実態を示すものとして興味深い。

これら十編（十一断章）がどのような経緯で集められたかはわからず、偶然の産物である可能性もあるものの、現在残る多くの写本の配列が四季の順であるなど、なんらかの編纂意図も垣間見えるようである。これからは個々の物語に対する研究を深めるのと同様に、物語の集合体としての『堤中納言物語』に対する論議を深める必要があろう。

第四部 物語の享受

第一章 『光源氏物語抄』所引「こまのゝものがたり」考

——散佚『こまの』・『交野の少将』・『隠れ蓑』との関係再検討——

現在、物語史の記述がなされる際、散佚物語を考慮に入れた記述がなされることはあまりない。だが、さまざまな散佚物語を考慮に入れると、現存の物語のみで描かれる物語史がいかにかんたの実態にそぐわないかが知られよう。そのような散佚物語のうち、有名な古物語である『こまの』、『交野の少将』、『隠れ蓑』に関連するかと疑われる注記が鎌倉時代の源氏物語注釈書『光源氏物語抄』に見られる。「かたのゝ少将はかくれみのゝ中将のあに也。但、「かくれみの」は中将の時にあらば、かくれみのゝ東宮亮といはれし人也。『こまのゝ物語』のはじめの巻也」という奇妙な記述がそれである。稲賀敬二氏・中野幸一氏は、この記述について詳細に考察した上で、三つの古物語が相互に関連があつたのではないかとする。

本稿では、『光源氏物語抄』所引「こまのゝ物語」の記述を改めて検討した上で、『光源氏物語抄』所引「こまのゝ物語」が何であるのかについて考察を加える。その結果、①『光源氏物語抄』の記述は三物語に関する記述ではなく、「こまのゝ物語」という一つの物語に関する記述だということ。②『こまの（光）』と『こまの（他）』は別の物語と考えられること。③『こまの（光）』に登場する「交野の少将」という人物は、『交野の少将』という古物語（あるいは説話）と直接の引用関係にはないと考えられること。④『こまの（光）』と、他の資料が引く『隠れ蓑』は同じ物語と考えられること。以上の四点が

明らかとなった。

この四点から導き出されるのは、『こまの（光）』が、書名が『こまの』で内容が『隠れ蓑』という奇妙な物語だということである。

物語の写本において、外題や内題の誤記は数多くある。いま問題としている『光源氏物語抄』自体、外題は「紫明抄」とするものの、内容は、いわゆる『紫明抄』ではなく、内題を「光源氏物語抄」とする。そのような例を考慮に入れると、西円たちが、外題を誤って「こまの」または「こまのゝ物語」とした『隠れ蓑』を入手し、『光源氏物語抄』に引用した可能性が極めて高いのではないだろうか。

『隠れ蓑』の本文を示す資料が見つかったことで、『隠れ蓑』の内容を復元し、『隠れ蓑』の享受時期や範囲を探る研究の進展が期待されよう。

第二章 『光源氏物語抄』から『河海抄』へ——中世『源氏物語』享受の一側面——

『光源氏物語抄』、いわゆる『異本紫明抄』は、鎌倉時代の大部な『源氏物語』古注釈集成であり、近年刊行された『源氏物語 注釈書・享受史事典』でも「鎌倉期の広汎な源氏物語研究の様相を知る資料としても貴重である」と書かれる。この『源氏物語 注釈書・享受史事典』に「異本紫明抄」として立項されるように、『光源氏物語抄』は「異本紫明抄」と通称される。この名称からうかがわれるごとく、以前は『紫明抄』の異本として扱われていた。『紫明抄』とは異なる注釈書として認識された後も、多数の「素寂説」や先行諸注が記載されること、後世の諸注に『光源氏物語抄』の名称が引かれられないこと、などの理由により、『紫明抄』や先行注との関係において論じられることが多く、『光源氏物語抄』の後世への影響についてはほとんど研究されてこなかった。

本章では、堀部正一、奥村恒哉が触れつつも、影響関係については明確にされることになかった、『光源氏物語抄』と『河海抄』の関係について考察した。その結果、『河海抄』が、『光源氏物語抄』の多くの注を、引用・継承することが明らかになった。

第三章 『光源氏物語抄』と了俊筆伊予切——『光源氏物語抄』の流通経路——

前章の考察に抛り、『光源氏物語抄』が『河海抄』に影響を与えていたことが明らかになったが、『光源氏物語抄』の成立圏から、『光源氏物語抄』を書写している今川範政へ至る流通経路は未だ不明確なままであり、『光源氏物語抄』の後世への影響も、『河海抄』以外の指摘はない。本章では今川了俊筆伊予切と『光源氏物語抄』の関係について考察した。伊予切は、了俊八十五歳の応永十七年（一四一〇）書写と知られる。空蟬巻は卷子本で、桐壺・夕顔巻が古筆切の形で残っている。

これらには朱と墨で傍注や頭注が書き込まれている。先行研究では指摘されていないものの、それらの注の中に、『光源氏物語抄』を引用したことが明らかな注が複数見られる。

ここでも『河海抄』の場合と同様、『光源氏物語抄』の後世への影響がうかがえるとともに、『光源氏物語抄』の書写者である今川範政が、了俊経由で『光源氏物語抄』を入手したかと推測されよう。さらに、冷泉為秀（や二条良基）を軸として、了俊、善成が近い関係にあったことから、『光源氏物語抄』成立圏から今川範政へ至る過程で四辻善成は『光源氏物語抄』を披見したかと推測された。

これらの事実によつて、従来ほとんど指摘されて来なかった、『光源氏物語抄』の後世

への影響、享受の一端が判明するとともに、『光源氏物語抄』が『河海抄』や了俊の伊予切に大きな影響を与えることから、『源氏物語』古注釈史における『光源氏物語抄』の位置づけは大きく変化してくるものと考えられる。

第四章 近世前期の写本製作——伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故から——

近世は版本の時代であると言われる。だが、近世に入ってから写本の流通量が格段に増大したことは、現存する近世期写本の数量からもうかがえる。しかし、残念ながら写本を製作していた書肆の実態は、ほとんど知られていない。あまりにも資料が少ないのである。このように実態の未だ定かではない近世前期の写本製作・奈良絵本製作に関わる資料が、今回考察した、早稲田大学図書館蔵伝三条西実枝筆『源氏物語』の表紙裏反故である。この表紙は原表紙だが、表紙裏には書状や書肆書留の反故、写本断簡が多数含まれる。当該本の製作年次は表紙裏反故の記載により明暦二年（一六五六）以降元禄年間あたりまでと考えられ、表紙裏反故の多くも一軒の書肆から出たものと推測される。その書肆名だが、これも表紙裏反故を丹念に見ることにより、「表紙屋弥兵衛」と推測される。この表紙屋弥兵衛は、表紙裏反故記載によつて、奈良絵本や高級写本を主に扱っていたことが知られる。表紙屋弥兵衛で行われるさまざまな作業が表紙裏反故記載によつて判明するが、「筆代」「かきうつし代」「ひつ代」などの記載によつて、職業書写者の存在も裏付けられる。

以上のように、近世前期の写本作成の具体的様相を知る上で、早稲田大学図書館蔵伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故は、豊富な情報を含んでいた。その表紙裏反故によつて、貴族が依頼する高級写本や、商品としての奈良絵本を製作する表紙屋弥兵衛の、さまざまな作業、取り扱う品目、価格など、近世前期の職業的写本製作の一面を垣間見ることができた。作品研究において、今までは書物の本文（文字）にのみ興味が注がれ、書物の物質性（筆、書物の形態、料紙）について注目されることは少なかった。だが書物の形態（奈良絵本、嫁入本、版本等々）や料紙、筆の差異によつて、受容階層にも変化が見られるであろうし、付加価値も変化しよう。例えば、嫁入本などには、ほとんど見られた形跡のない本も多いが、このような形の享受によつて、当時の人々が、物語の写本に、本文以外の価値を見出していたことが知られる。

書物の形態や流布と、作品内容の享受を結びつける研究は、近世写本においては、未だ盛んであるとは言えない。これから更に追究されるべきであろう。

資料編

資料編第一章では、第三部第一章で考察した、『風につれなき物語』の現存諸本のうち、もつとも古態を残すと考えられる無窮会図書館神習文庫蔵『風無面物語』の翻刻を付し、さらに、丹鶴叢書版本との校異を載せた。

第二章では、第一部第三章、第四部第四章で考察した、伝三条西実枝筆『源氏物語』表紙裏反故の翻刻を付した。

どちらも初めて翻刻される資料である。

終章

以上、さまざまな物語を、諸本整理、本文生成、物語の享受、改変、写本制作などの視

点から、縦断的に論じてきた。従来の物語文学研究において、二次的要素として見逃されてきたこれらの視点は、「物語」というものの実態を考える上で欠かせないものであろう。